

■第 114 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 イザヤ書 2・1～5

当時（紀元前 8 世紀頃）、ユダ王国は経済的には繁栄していましたが、偶像礼拝と不正で社会は墮落し、イザヤはこの現実の中で「神の国到来の希望」を預言します。アモツの子イザヤは、ユダとエルサレムの将来について神の啓示を「幻」にっより、神の国の到来を霊的なビジョンで示されます。世の終末が「終わりの日」ではなく、イエスの再臨により、新しい神の国で神の支配が完成します。神の臨在を象徴するシオンの山が「主の神殿の山」で、霊的な神の国のことです。すべての民は神を求めて集う普遍的な救いを象徴した言葉が「国々がこぞってそこに向かう」であり、イスラエルの民を「ヤコブ」と呼び、神殿は「神の家」のことです。人々が神を礼拝し、その教えに従う霊的な行為を「登る」と言い、正義・愛・平和・真実に生きるよう導く神の教えを「主が道を示される」と呼び、この教えを実生活で実践し「その道を歩み」ます。「主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから」とあるので、神の真理は神殿を中心として、全世界に広がり、「主は国々の争いを裁く」ので、神の公正により、真の平和が訪れ、神が教え諭し、正しい道に導き、神への立ち返りを促し「民を戒め」ます。「剣や槍を鋤や鎌に打ち直す」ことで、武器が農具に変えられて戦争は終わり、争いのない真の平和（シャローム）が訪れ、民はもう「戦うことはしない。」神の真理と愛の光（教え）に照らされている今、神の光を浴びて「主の光の中を歩もう」との勧めです。

●第 2 朗読 ローマへの手紙 13・11～14

パウロは、この章の前半では信徒に「神の秩序の中で生きよ」「愛によって律法を全うせよ」と語り、この箇所になります。救いの完成が近づき、信仰に「目覚めさせる時」が、「今の時だ」と語っています。信仰に無関心や罪の状態が「眠り」で、神の御心に「目覚め」て、無頓着にならずに敏感に responding、再臨を意識した生活を送ります。全人類への「救いが近づき」今はこの完成途上にあります。「夜は更け」明けに近づき、罪や悪の時代は終焉となり、神の支配の完成は迫っておりこの「日は近い。」神に背く行為（ローマ 13・13）が「闇の行い」なので、「光の武器」の霊的な防具（エフェソ 6・13-16）を身に付け、悪に対抗します。神の御前では隠し事はせず、誠実で透明な生き方で「日中を歩み」ます。節度・礼儀・思いやり・自制心を備えて、信仰者として恥じることなく「品位（秩序正しく）」のある歩みをします。「闇の行い」の具体例としては、「酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみ」などであり、欲望や感情に支配されず、聖霊に導かれた生活を送ります。イエスの心・言葉・行動・祈りのありように倣って、これを「身にまとう」ことにより、これらを自らの血と肉として、「新しい生き方」を目指します。

●福音書朗読 マタイ 24・37～44

イエスの「オリーブ山の説教」では、「エルサレム神殿の崩壊」と「終末」について語られ、弟子たちはこの前兆について尋ねます。（マタイ 24・3）イエスは、「終わりの日」は誰にも分からず、（マタイ 24・36）突然に起こると語り、この箇所に入ります。イエスの再臨は「ノアの時と同様」突然起きます。当時の人々は警告を信じず、普段通りの生活を続けていたので洪水で滅びます。再臨も同じで、予告なく必ず訪れます。「食べたり飲んだり……嫁いだり」して、この世の快楽や欲望に心を奪われ、神を顧みない生き方を戒めています。イエスは、「油断・無関心・不信仰」に対して、警告しておられます。救いに与る者の選別では、主の再臨の際、神に従っていた者は、新しい神の国へ「連れて行かれ」迎え入れられます。一方、信仰を持たない者は、「裁きに残され」陰府に行きます。同じ場所でも、信仰の有無によって運命が分かります。「二人の女」も同様です。「賢いおとめ」（マタイ 25・4）に倣い、主の教えを実践し、「目を覚まして」主が再臨される際、恥じることはない生き方をします。「泥棒が夜に来る」との喩えでは、「油断大敵」「神に仕え、終末に備えよ」と語られており、心地よい緊張感を持ちながらの歩みとなるのでしょう。

【クリスマス】「Christ-Mass」キリスト教が公認され、4 世紀ごろ、ローマの冬至祭と結びつき開始。本質は、救いの出来事を記念する礼拝。

人類の救済に、神の子を十字架の死によって罪を贖わせるために、人の子が誕生された日。「静かで深い喜び」「沈黙の日」

【待降節】の 4 回 ① 旧約の救いの歴史を 4 段階で振り返る。② 四つの来臨（預言・初臨・現在・再臨）を黙想する。

③ 四方（東西南北）に広がる福音を象徴。④ 歴史的に 4 週間の準備期間として定着した。

著者 蒲池 明憲